

「初めての訪中で感じたこと」

1 B 弘前大学 伊藤まいか

訪中の動機と事前の気づき

私は今回、初めて中国大陆を訪れた。大学で中国語を学び、コロナ禍でオンライン留学を経験したものの、現地の文化を直接体験したいという思いが強かった。また、中国ドラマで見ていた紫禁城や万里の長城を自分の目で見たいという単純な好奇心もあった。正直、9.18 事件や満州事変についてはほとんど知識がなく、事前研修で自分の無知さに改めて気づかされた。歴史を受験のためだけに学んできた自分の姿勢を反省し、「誰かにとって当たり前のこと」も、自分にとっては初めて知ることばかりだと痛感した。この経験を通して、もっと学ぶ努力を自分から行い、学ぶ機会に積極的に足を運ぶことの重要性を強く感じた。無知は時に怖く、情報が簡単に手に入る現代だからこそ、情報を鵜呑みにせず自分で選択し判断する姿勢が必要だと気づいた。

歴史と文化から学んだこと

訪中中、博物館や記念館を訪れるたびに「こんなことがあったのか」と驚かされ、歴史の重みを肌で感じた。中国側から見た当時の歴史認識や教訓を学ぶことで、反日感情を抱く背景も理解できるようになった。しかし、今回の体験では中国側の視点しか学べなかったため、日本は同時期どのような状況だったのかを帰国後に自ら調べ、両国の歴史を理解することが必要だと感じた。歴史を学ぶことで過去の過ちを繰り返さない意識を持ち、未来に生かすことの大切さを実感した。特に、現地で展示されていた資料や映像からは、書物やネット上の情報だけでは伝わらない生々しさを感じ、歴史を学ぶ意味をより深く理解できた。

国際交流とコミュニケーションからの学び

現地大学での交流も非常に貴重な経験となった。中国語での会話は難しく、言葉が通じないもどかしさもあったが、意思疎通ができた瞬間の喜びは大きかった。新しい友人ができ、新しいコミュニティに参加できたことは大きな収穫である。日本に帰ってからも WeChat を通じて交流が続けられることは、現代に生まれてよかったと感じる点だ。また、日本のことを中国人学生が自分よりも詳しく知っていることに驚いた。特にアニメや音楽などの文化面で、私が当然のように思っていたことが、他国にとって誇るべき価値であることに気づいた。自分の「当たり前」が他者にとっての当たり前ではないことを実感し、文化の多様性を尊重する重要性を学んだ。さらに、相手の文化や歴史背景を理解したうえで会話することで、互いの信頼関係が深まることも実感した。

また、中華料理にも圧倒された。毎食豪華なレストランや円卓で食べるご飯は、人生でもう一度味わえるか分からないほどの豪華さだった。特に火鍋は、日本のしゃぶしゃぶや鍋とは異なり、肉の種類も野菜も豊富で、味も見た目も楽しめた。食を通して文化を体感できる面白さを感じるとともに、一緒に参加する日本人学生と交流し、仲を深められたのも良かった。東北に住んでいる私は、九州や西日本の学生と関わる機会が少なかったため、日本国内でも文化や価値観の違いを感じることができ、学部や専攻も異なる友人ができたことはとても大きな出会いであった。特に仲良くしてくれた二人の友人には感謝している。

将来への展望と看護への応用

来年から看護師として働く中で、中国人の方や異文化を持つ患者と関わる機会もあるだろう。良い看護を提供するためには、相手の文化や背景を理解することが重要であり、会話やコミュニケーションを大切にしながら看護を実践したい。また、これまであまり意識してこなかった愛国心についても考え直すきっかけとなった。自国を誇りに思うと同時に、他国についての知識も深めることが必要だと感じた。国際的な視野を持つ看護師として、多くの人々に少しでも助けになれる存在になりたい。今回の訪中は、学びを現場や日常生活に生かす姿勢を育て、未来に向けての行動の糧となった。現地での体験や交流を通じ、知識と感覚を伴った学びの重要性を実感したことで、今後も積極的に現場に足を運び、自ら学び続ける姿勢を大切にしていきたい。さらに、自分の経験を周囲の人と共有することで、異文化理解の輪を広げ、将来の看護現場で役立てたいと思う。今回の訪中は、本当に行って良かったと心から思える経験となった。

「国際未来社会で活躍する人材になるために」

1B 明海大学 大藏千瑛

9月8日から14日までの一週間、中国の北京・長春・瀋陽を訪問し、現地の大学生との交流や博物館見学を通じて多くの学びを得た。出発前の私は、中国に対してあまり良いイメージを持っていなかった。報道を通じて耳にする大気汚染や言論統制の話題が先入観となり、周囲からも「本当に大丈夫なの？」と心配されることが多かった。しかし、実際に現地に足を運び、人々と直接関わることで、その印象は大きく変わった。

現地の学生たちとの交流は、今回の訪中で最も印象に残った経験の一つである。吉林大学や遼寧大学で出会った学生たちはとても親しみやすく、文化や言語の違いを超えてすぐに打ち解けることができた。帰国後も WeChat を通じてやり取りを続けており、互いにスラングや日常的な表現を教え合う関係が続いている。翻訳アプリや教科書には載っていない「生きた言葉」に触れることで、中国語学習に対するモチベーションが高まった。また、日本語を教える場面では、自分の言語を体系的に見直す必要があり、それが結果的に自分の理解を深めることにもつながった。こうした相互学習は、単なる語学習得を超えて、互いの文化的背景を理解し合うことの重要性を実感させてくれた。

博物館見学を通じて、中国の歴史や経済発展について学べたことも大きな収穫であった。中国は近代以降、激動の歴史を経験しながらも改革開放を経て急速な成長を遂げ、今や世界経済を牽引する存在となっている。その背景を展示物を通じて学ぶことで、ニュースや統計だけでは見えない現実を体感することができた。北京の大都市の活気、長春や瀋陽で見られた歴史的建築と現代的な高層ビルの共存は、中国のダイナミズムを象徴しているように感じられた。こうした体験は、国際関係を考える上で「相手国を一面的に捉えないこと」の大切さを実感させるものであった。

私は大学で口腔保健を学んでいることもあり、現地では特に歯ブラシや歯磨剤の売り場に注目した。日本ではあまり見かけない製品や成分が並んでおり、健康に対する価値観の違いを垣間見ることができた。例えば、中国では漢方を応用した歯磨剤や、ホワイトニングを強調した商品が多く、生活習慣や美意識の違いが反映されていると感じた。言語の壁から成分表示を完全に理解することは難しかったが、今後中国語を学ぶ続けることでより深い理解が可能になるだろう。口腔保健の専門分野においても、国際的な視点を持つことは欠かせない。将来、異なる文化や習慣を持つ人々に歯科衛生の知識を伝える場面では、今回の経験が必ず役立つと確信している。

また、訪中国の日本人メンバーからも大きな刺激を受けた。参加者の関心分野は政治や経済、科学技術や芸術など多岐にわたり、同じ経験を共有しながらも異なる視点で中国を捉えていた。自分とは違う専門領域からの考察に触れることで、多角的に物事を考える姿勢の大切さを再認識した。国際関係を考えるうえでも、一国の見方にとらわれず、多様な立場から理解を試みることが求められる。

今回の訪中を通じて得た最大の学びは、「実際に経験し、自分の目で確かめることの大切さ」である。報道やインターネット上の情報に頼るだけでは、偏った認識に陥る危険がある。現地の人々と交流し、生活や文化に触れることで初めて見えてくるものがあつた。今後の国際関係においても、互いの国民が直接交流し、信頼関係を築くことが必要不可欠だと強く感じた。

私は将来、国際未来社会に対応できる歯科衛生士として活躍したい。そのためには、専門知識を高めるだけでなく、異文化理解を深め、多様な人々と協働できる力を養う必要がある。今回の訪中で得た友情や学びは、その第一歩である。今後も海外での経験を重ね、多角的な視点を持ち続け、国際社会に貢献できる人材へと成長していきたい。

短い一週間ではあったが、この訪中は私にとって人生の転機となる経験だった。友情を育み、固定観念を打ち破り、自らの専門性を国際的な視点と結びつけることができた。この経験を糧に、日中両国の相互理解を促進する架け橋となれるよう努力していきたい。

最後に、このような貴重な機会をくださった日本中国友好協会並びに中国日本友好協会の皆さまに心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「医療の観点から見る訪中団」

1 B 国際医療福祉大学 伊達穂乃花

私の訪中前の中国に対する印象は、汚染がひどく大気の状態も悪い国だった。経済の発展と環境問題は密接にかかわっており、どちらかを重視するとどちらかがおろそかになる。中国の経済成長は近年下がってきてはいるが、GDP 成長率 5%以上を維持している。日本と比較すると日本の成長率は 0~2%のため成長が著しいことがわかる。このことやニュースによる情報より、中国の大気や環境の汚染による公害は深刻であると決めつけていた。公害は大気汚染、水質汚染、土壌汚染、騒音、地盤沈下、悪臭の 7つの指標により分けられる。しかし、実際に訪中してみると空気もきれいであり、騒音も少なく、ごみも落ちていなかった。大気に関しては日本で報道されるような視界が見えなくなるほどの汚染はなく、大気の汚染による体調不良もなかった。ごみなどによる土壌汚染に関しては、訪れた観光地や歩いた道路で清掃員がおり、放置されたごみをきれいにしたり、公共の設備を掃除していた。水に関しては日本とは違い水道水はまだ飲むことができないが、きちんと上水道、下水道が完備されておりきれいな水が流れていた。騒音に関しては地域によって差があった。北京、長春は車の音や工場等からの音はほとんどなかった。瀋陽は車の音が他の 2つの地域より大きかった。調べてみると 2021 年に騒音汚染防止法が制定されており、騒音問題に対処していることが分かった。北京、長春と瀋陽の騒音の差は今回の訪中では解明できなかった。悪臭に関しては悪臭が気になる地域はなかった。このことより、日本のニュースで見る、中国は汚染が激しい、という事実はなく法律や行政、地域の方々により町のきれいさが守られていることが分かった。以上のことから私は偏見を持たず、実際に訪問してみる大切さも学習することが出来た。訪中前と訪中後で中国の環境、ヒトに対する考えが大きく変わった。日本での報道、噂を鵜呑みにするのではなく、実際に訪れたり、その地域についてよく調べ、歴史等からその地域のことを考察したり、地域の方々と実際に交流することが大切だと感じた。

今回の訪中団のプログラムの中で一番心に残った場所は 9.18 歴史博物館である。歴史の授業により 9.18 の柳条湖事件をはじめとした満州事変や、日本軍による中国人への侵略については知っていた。しかし、731 部隊については全く知らなかった。731 部隊とは日本の部隊で第二次世界大戦中に旧満州で細菌兵器を人体実験等により開発していたものである。資料館の展示により、自分が大学で学習した薬品、細菌を用いて人を殺すための実験をしていたことに驚いた。私は病気等で苦しんでいる人の痛みを少しでも和らげるために、人体、細菌、薬品の学習をしている。今学習した知識が、目的を変えると人を傷つけるものになるということを意識させられたとともに、世界がまた戦争の方向に行ったとき全力で止めることの大切さを学んだ。

今回の訪中団では、実際に行ってみないとわからないことを沢山学ぶことが出来た。中国は大きく、歴史も深いためまだ知らない事や行ってみたい場所が沢山あるのでまた訪中したい。

「新たな視点から見た隣国」

1B 東海大学 千葉 優羽

今回日中友好協会の訪中国に参加させていただき、中国文化を理解する為の貴重な機会を得ることができた。出発前の私は、中国に対して経済成長が著しい大国であるが、日本とは政治的に緊張関係を抱える隣国という程度の漠然としたイメージしか持っていなかった。しかし、中国語を学ぶ学生として誰かのフィルターを通して見る伝わる中国のイメージの真相を自分の目で確かめる必要があると感じた。今回の訪中を通じて、一面的な印象が大きく変わり、中国の社会や人々をより立体的に理解するきっかけを得られたことを心から感謝している。

まず印象に残ったのは、現地の学生との交流である。吉林大学で同世代の学生たちと意見交換をした際、彼らは日本文化に強い関心を示し、アニメや音楽の話題で盛り上がる一方、将来のキャリアや国際問題についても真剣に語っていた。日本の学生と変わらぬ姿勢に親近感を覚えると同時に、彼らが母国の発展を誇りに思い、社会に貢献したいという強い意志を持っている点に感銘を受けた。誰かのフィルターがかかった報道では見えてこない今のリアルな中国の若者の意見に触れたことは、何より大きな学びであり、自分の中国人の見方が変わった瞬間でもあった。

また、都市の発展ぶりにも目を見張った。高層ビルが立ち並ぶ街並みや、デジタル決済が生活の隅々に浸透している様子は、まさに経済成長の成果を実感させるものであった。また、驚いたのは清掃が行き届いた街並みだった。一方で、歴史的建造物や伝統文化も大切に保存され、人々の生活に息づいていることにも気づかされた。近代化と伝統が共存する姿を目の当たりにし、中国社会の多層的な側面を感じ取ることができた。

さらに、今回の訪問を通じて日本から見た中国と現地で感じた中国とのギャップを強く意識した。日本の報道では、中国の政治や国際関係の側面が強調されることが多いが、実際に現地で出会った人々は、温かく親切で、相互理解を求めている姿勢が印象的であった。政治的な枠組みを超えて、人と人との交流が信頼関係を築く基盤になることを改めて実感した。

この経験は、私自身の将来にとっても大きな意味を持つと考える。国際社会における日本の立場を考えると、グローバル化してる現代社会で隣国である中国との関係を避けて通ることはできない。だからこそ、今回の訪中で得た現場の声や交流を、自分の学びや今後の活動に活かしていきたい。将来、国際交流や協力の分野で働く際にも、この体験を原点として多角的な視点を持ち続けたいと考えている。

総じて、今回の訪中は私にとって固定観念を覆し、新たな視野を広げる貴重な機会であった。文化や社会の違いを乗り越えて互いに理解し合うことの大切さを体感し、それが日中友好の未来につながると確信している。今後も学びを深め、今回の経験を次の一歩へとつなげていきたい。

「中国を訪れて感じたこと」

1B 天理大学 辻直登

今回は日中友好大学生の一員として北京、長春、瀋陽を 1 週間にわたり訪問しました。今までは、授業やテレビ、インターネットを通じてしか中国という国を知らなかったため、今回初めて実際に自分でたくさんの経験を通してたくさんの視点から中国という国を感じることができ自分自身の成長を感じることができました。また、今年は戦後 80 年であり、抗日戦争勝利 80 周年ということであったため、それぞれの都市で抗日戦争に関する歴史館を訪れました。

また、歴史的な視点だけでなく中国の現代の技術的な面や都市開発などについても学びました。実際に経済発展や都市開発について学んで、中国の方が発展しているなどという場面も多々あったのではないかと思います。

長春や瀋陽については、訪中する前までは、イメージでそんなに発展していないのかなと思っていましたが、実際飛行機の上から見るとすごく発展していたのでやはり、実際に見ることによって自分で体験できることが多かったです。

私は、大学に入ってから中国語を学び始めてまだ中国に行ったことがなかったため、実際に現地で中国語を使う機会があればしっかり意思疎通ができるのかという不安はありましたが、現地の方と意思疎通を行うことができ、さらには、私たちの班ではいろいろな学生がいたので、中国語ができないという学生もいました。なのでみんなの中国語のサポートに回り現地の方との間に入ってお互いが言っていることを中国語や日本語で通訳をしていました。実際に通訳を行うことで現地の方とスムーズな会話を行うことができました。また、今回一緒に同行してくださった先生方の手助けもすることができすごくよい経験を担うことができました。さらには、吉林大学と遼寧大学の学生と交流をする機会があり、実際に現地の学生と交流するのはなかなか経験できない体験だからこそ有意義な時間を過ごすことができました。

長春で中国の伝統である魚皮画の体験もすることができ実際の魚の皮を使用したものでした。中国でも日本のように実際に自分で現地の伝統作品を体験することでどのようなものなのかというのを実際に自分で経験できたのですごくいい経験になりました。

また、今回長春において朝早くから太極拳を体験することもできました。太極拳をやってみたなと思っていましたがなかなかできずじまいであったのでまさか中国でできるとは思っていなかったので大変良かったです。

今回この日中友好大学生の一員として中国を訪問することができたことが自分の視野が広がっただけでなく価値観や考え方なども新たな経験として非常に刺激的な毎日でした。日本で知識を得ることよりもやはり実際に自分でその国に行って学ぶことで異なった視点から物事を見ることができないのではないかと思います。また、今回実際に中国を訪れたことで言語というものにはいろいろな意味が含まれているんだなという印象を受けました。この訪中団で自分が目にしたことを今後自分の人生にとって有意義な時間であり、また、いろいろな人に訪中団で経験したことや感じたことなどを伝えていけたらいいなと思っています。最後にこのような経験をさせてくださった方々や随行してくださった方々には感謝しかありません。ありがとうございました。

「心を繋ぐ、未来を繋ぐ」

1B 広島大学3年 中嶋良々

はじめに、私たち大学生約100名に対して愛を持って安全に導いてくださった安藤団長をはじめとする引率の先生方、日中友好協会の皆様、中日友好協会の皆様、中国人民对外友好協会の皆様、そしてこの訪中団に携わってくださったすべての方々に心より感謝いたします。多くの貴重な経験とかけがえのない時間を過ごさせて頂き本当にありがとうございました。

私はこの訪中団に参加する前に大阪の中国総領事館主催の訪中団に参加させていただいたため、2回目の訪中でした。2回目であったにも関わらず、中国の規模の大きさや中国の人々の温かさ、中国の面白さ、楽しさに1週間の間ずっと心が踊らされていました。帰国して早々ですが中国を恋しく思っています。多くの団員が訪中前のイメージが不安、興味があるけれど行く機会があまりない、近くて遠い国など消極的なものが多かったです。しかし、訪中後にはまた中国に行きたい、中国へのイメージがとても良くなったなどポジティブになったように感じています。1つの大国、「中国」ではありますが地域によって食べ物、文化など多様です。私はこれまでの2回の訪中で計4都市を訪れることができ、違いを身をもって体験することができました。これらの経験は私の人生においてきっと大きな意味をもつこととなるでしょう。実際に自分の目で見て感じ体験することは人生における財産、自分自身の知恵、力となります。

今回の訪中団では1号車b班の副班長として参加させていただきました。一般的には訪中し体験することに尽きると思いますが、副班長という役割をいただいたため1週間の間誰よりも責任感をもって行動しないといけないと訪中前から感じていました。やはり慣れない環境の中、不安に感じることもありましたが、また頼りないと感じた方もいると思います。同じ班のメンバー、先生方、訪中団を通してできた新しい友人たちのおかげで1週間楽しみながら全力で駆け抜けることができました。

今回の訪中では北京、長春、瀋陽を訪れました。私は特に瀋陽の『9.18 歴史博物館』がとても印象に残っています。誰しもが知っている『9.18 事件』についての博物館です。私はこの事件を中学生の歴史の授業で習いました。「9.18 事件という名前は知っている。しかし詳しい内容は知らない。」これが私の訪問前の状態でした。実際に訪問してみると深く内容を知ることができました。多くの先生方がおっしゃっていました。このような博物館や説明、展示は反日や思想を押し付けるためではないと。中国もさらには多くの日本人も被害者であり、過去に犯した過ちを二度と繰り返さないために、より良い平和な未来を切り開くために過去から学ぶのであると。

私たちの役割とは何でしょうか。何ができるのでしょうか。私は日中両国の末長い友好と発展のためにまずは将来を担う私たちが相手を理解する、尊重する、交流することが重要なのではないかと感じています。国籍や言語、性別、宗教などにとらわれず相手を知ろうとする姿勢。この第一歩こそが日中友好の第一歩であると思います。

最後になりますが末長い日中両国の友好と発展を心より願っています。

我爱中国♥我爱日本♥

(追伸)

中心となって頑張ってくれた班長、副班長。

素敵なパフォーマンスを考えてくれたパフォーマンス係。

みんなの様子を伝えてくれた記録係。

健康を1番に気遣ってくれた健康係のみんな。

私とたくさんお話してくれた人！

本当にありがとう。めちゃくちゃ楽しくて有意義な時間を過ごせました！またみんなで遊ぼうね！みんな大好き！我爱你们！

「訪中で得たもの」

1-B 神戸市外国語大学 長瀬朝有

今回、私は日中友好協会の大学生訪中国に参加し、初めて北京・長春・瀋陽の三都市を訪問した。この訪中を通じて得た経験や知見について、自身の参加目的に沿って述べたいと思う。

はじめに、私が本プログラムへの参加を志望する1つ目の目的は、中国の実態を自分の目で確かめるためであった。大学で中国の言語や文化について学ぶ中で中国に対する印象が大きく変化したことをきっかけに、これまで私は実態を知らず限られた情報だけで中国という国を判断していたのだと感じたからだ。そして、中国を多様な角度から正確に捉え、固定化したイメージを払拭したいと思い本プログラムに参加した。

まず、テレビや新聞・ソーシャルメディアを通じて私が抱いていた中国の印象は「徹底された監視国家であり、暴動やデモを通じて人々が自分の意見を強く主張する過激な国」というイメージであった。実際、道路や空港ではおびただしい数の監視カメラがあり、移動には厳密な荷物検査が伴い、人々はSNSの利用を制限されるなど、監視国家であるというイメージは概ね正しかった。しかし、訪中前の私はその印象にとどまるのみであったが、訪中後は多角的に考えられるようになったと思う。例えば、戦後目覚ましく発展を遂げた重工業や、新時代を牽引する最先端のテクノロジーなどである。博物館見学を通して、これまで中国は国民1人1人が高い熱量と信念を持って現実を前に進めて来たことを知った。そしてそれは、中国政府の強靱な統率力や推進力と関係していると考えられるようになった。監視国家であるからこそ、中国政府は強固な一体感を持つことを実現可能にし、新たな時代を切り開くことができるのだと思う。

このように今回の中国訪問を通して、中国という国を多様な角度から正確に捉え、より自分自身の中国に対する考えを深めることができたと感じている。

次に2つ目の参加目的は、様々な社会的・文化的な背景を知り、より深いコミュニケーションが取れる人材になることであった。来年から社会人になるにあたって、人々の力を集結させて社会に貢献できる人になりたいと考えていた。そのため、多くの学生や現地の方々と交流できる機会を通して、様々な価値観やバックグラウンドを持つ人と積極的に関わることができると思い、訪中に参加するに至った。

結論から言うと、人々との交流が本プログラムの中で最も深く印象に残っている。まずは、中国大学生との交流である。今回は吉林大学と遼寧大学の方々と交流することができたが、彼らは本当に暖かくて積極的に話してくれた。現地の文化や生活習慣を教えてもらったほか、個人的な趣味や音楽の好みについても交流した。限られた時間の中だったが、言語や価値観の違いを体感しながら異文化交流できたのはとても貴重な経験となった。

そして最も思い出に残ったのが、共に訪中に参加した学生との交流である。食事や博物館見学・パフォーマンス練習などを共にしただけではなく、バスでの移動時間や夕食後の自由時間で多くのことを語り、最高の思い出を作ることができた。これほど楽しくて濃い1週間を過ごすことができたのは、間違いなく優しさとユーモアに溢れた素晴らしい訪中メンバーのおかげだと思う。

今回の訪中を通じて、実に貴重な経験をさせていただいた。この経験を活かし、現地に赴いて体感した中国を1人でも多くの人々に伝えたとともに、これからも中国の言語・政

治・文化・歴史について学び続け、日中友好に寄与したい一心である。

最後に、本プログラムを企画してくださった日中友好協会の皆さま、並びに中日友好協会の皆さま、中国政府の皆さま、その他すべての関係者の皆様に多大なる感謝を申し上げます。

「過去と向き合い、未来を描く旅」

1B 関東学院大学 南條 柊

今回の訪中プログラムは、単なる観光旅行ではなく歴史や文化、そして現代中国を多角的に学ぶ貴重な機会だった。万里の長城や故宮といった中国を象徴する世界的遺産に触れたことはもちろんだが、それ以上に心に残ったのは歴史と現代社会が複雑に結びついていることを実感できた点である。

とりわけ印象深かったのは、中国共産党歴史博物館や九・一八歴史博物館など近代以降の歴史を学ぶ機会だった。日本と中国の関係史には、避けて通れない過去がある。展示を通して、戦争の被害や国の歩みを現地の視点から学ぶことで、これまで日本の教育を通じて得てきた理解との違いを痛感した。同時に歴史を一面的に捉えるのではなく、多様な視点を持って理解する重要性を強く感じた。歴史は単なる過去の事実ではなく、現在の社会や国民感情に大きな影響を与え続けているのだと改めて認識した。

また、長春での民族文化体験や魚皮絵の制作を通じて、多様な民族が共存する中国の姿に触れることができた。中国といえば巨大な国土や経済力といったイメージが先行しがちだが、地域ごとの文化や人々の暮らしにはそれぞれ独自の歴史と誇りがある。その多様性の豊かさを知ることは、今後国際社会の中で他者を理解するうえで大切な視点になると感じた。

さらに、吉林大学の学生との交流では同世代の若者がどのような夢や課題意識を持っているのかを直接聞いたことが大きな収穫だった。国籍や環境が違っていても、未来に向けて学び、社会に貢献したいという気持ちは共通していることに気づき自分自身の将来のあり方を考えるきっかけとなった。

今回の訪中で学んだのは、歴史の重みを忘れずに受け止めることと同時に、未来志向で交流を重ねる大切さである。過去を学びながら、現在を共に生き、未来を築くためには、互いの違いを理解し尊重する姿勢が欠かせない。旅行を終えて、日本に戻った今こそ、学んだことを自分の中だけに留めず、周囲に伝え実際の行動につなげていくことが求められていると感じる。

この一週間は、中国という国を「知識」としてではなく「実感」として学ぶ時間だった。得られた気づきを胸に、これからも歴史に向き合い国際的な視野を広げ続けていきたい。

「百聞は一見にしかず」

1B 慶應義塾大学 西村幸敏

今回、北京・長春・瀋陽の三都市を訪問するという大変貴重な機会をいただいた。私は大学入学後、中国語を第二外国語として学んできたが、そのきっかけの一つは「現地の人と直接中国語でコミュニケーションを取り、見聞を広げたい」という思いであった。今回の訪中国でその思いが現実となり、まさに学びを実践する機会となった。

まず北京では、故宮と万里の長城を訪れた。故宮は、これまで教科書や映像で見たことはあったが、実際に訪れるとその規模と壮麗さに圧倒された。一方、万里の長城を登った際には、果てしなく続く城壁の雄大さに言葉を失った。傾斜が急な部分も多く、登るのは決して容易ではなかったが、振り返った時に広がる景色は格別で、大きな達成感を覚えた。万里の長城の全長は約2万キロに及び、仮に私が1キロ歩いたとしても、全体のわずか二万分の一にすぎない。その事実を思うと、人類の文明の偉大さを改めて実感した。

長春では吉林大学を訪問し、学生との交流を行った。ここでの経験は、私にとって大きな自信となった。学生たちは日本の俳優やアニメ映画をよく知っていて、日本文化に対して親近感を抱いていることが分かり、とても嬉しかった。また、拙いながらも中国語で会話ができたことが何より嬉しく、学んできた言葉が実際に通じた瞬間は、努力が報われたように感じた。相手が笑顔で応じてくれたことで、言葉は文化や国境を越えて人と人をつなぐ力を持つのだと実感した。この交流を通して、今後さらに中国語を学び続けたいという思いが一層強くなった。

瀋陽の街については、「歴史と現代が共存している都市」という印象を強く抱いた。瀋陽故宮のような歴史的建築物が大切に保存される一方で、近代的な高層ビルが立ち並び、街全体に活気が溢れていた。また、道路の広さやシェアサイクルの数の多さには驚かされた。日本の都市とはスケールが異なり、GDPが全国第2位という経済力を肌で感じる事ができた。

さらに、今回の訪中で特に印象に残ったのは、瀋陽で訪れた「9.18 事件歴史博物館」である。ここでは、歴史の事実を詳細に学ぶことができ、日本にいただけでは触れる機会の少ない満州事変に関する展示を直接目にした。日本国内では戦争に関して広島や長崎の原爆が語られることが多いが、満州で起こった出来事について深く学ぶ機会は少ないと感じていた。そのため、現地で改めて学ぶことができたことは非常に貴重であった。展示を通じて、歴史は一つの視点だけでは語れず、さまざまな立場からの理解が必要であることを痛感した。自国の歴史を見つめ直すだけでなく、相手の立場からも歴史を学び、対話を重ねていくことの重要性を強く感じた。

瀋陽ではまた、人々の温かさにも触れることができた。売店で困っていた時に周囲の方が声をかけて助けてくださった出来事は特に印象深い。初めて訪れた異国の地で不安もあったが、現地の人々の親切さに触れることで安心し、人と人との距離がぐっと縮まったように感じた。

今回の訪中を通じて改めて感じたことは、「百聞は一見にしかず」ということである。日本での報道や世論を通じて抱いていた中国のイメージは、必ずしも現地の人々の姿や日常生活を反映したものではなかった。実際に現地を訪れ、街を歩き、人と話し、文化を体験することで初めて分かることが数多くあった。

遼寧大学での学生交流や文化体験をはじめ、北京や長春、瀋陽での体験はすべてが新鮮であり、私にとってかけがえのない学びとなった。この経験を通じて、言語や文化の違いを超えて人とつながることの喜びを知り、また歴史を相互に理解することの大切さを学んだ。今後も日中の若者同士が直接交流を重ねていくことが、両国の相互理解を深める大きな力になると確信している。私はこの訪問で得た学びと感動を日本に持ち帰り、周囲に伝えることで、日中交流の小さな架け橋になりたいと考えている。

「歴史を知り、未来を創る」

1-B 新潟県立大学 早川子楓

メディアではしばしば、日本と中国の関係が「対立」や「違い」という側面から描かれます。しかし、先日の中国訪問は、両国が共有する多くの「共通点」に目を向ける貴重な機会となりました。私は柳条湖事件が起きた場所を訪れました。私の中に妙な緊張が走っていました。それは、9月18日が近かったというのもあるでしょう。しかし、これから見る現実、日本軍の残忍さに目をそむけなくなっていたのかもしれない。今回ともに旅をしてくれた大学生たちはその現実を受け止め、次につなげようとする決意を持っていたと感じます。その勇気に私は助けられました。訪問を終えて迎えた9月18日は、私に特別な感情を抱かせました。これから、歴史的な背景を持つ日を迎えようとする異国の地。そこで過ごすことは、私にこれまでとは異なる視点から日中関係を捉え直すきっかけをくれました。

この旅で最も深く心に刻まれたのは、歓迎会の席で聞いたある言葉でした。「中国は、日本の軍隊と、日本の国民を分けて見えています。」この言葉は、私の頭の中で響き続けました。私たちは、過去の歴史問題と向き合うことを避けては通れません。しかし、彼らは歴史の暗い側面を忘れることなく、それでもなお、今を生きる私たち一人ひとりを偏見なく受け入れようとしてくれている。その言葉には、歴史への真摯な向き合いと、未来への希望、そして「個」を尊重する深い思いやりが込められていました。

旅の中で、見慣れない大きな円卓を前に、どこに座り、どう振る舞えばいいのか分からず少し戸惑いました。しかし、食事が始まるとすぐに、その心配は消え去りました。円卓は、絶えず回り続けています。目の前の料理だけでなく、隣の人の様子や、向かいに座る人の笑顔まで、自然と視界に入ってきます。料理が誰かの前で止まれば、「次はあなたの番ですよ」とさりげなく促し、皆の顔を見ながら「この料理は好きかな？」と思いを巡らせる。そこには、一種の思いやりのコミュニケーションが存在していました。この円卓での経験は、私にとって大きな発見だったのです。中国と日本には共通して存在する「協調性」や「思いやり」の心があります。円卓を囲むように、お互いの顔を見ながら、相手を思いやる心を持って接すれば、どんな違いも乗り越えられる。そんな希望を、私はこの旅で、この円卓で、確信したのです。

中国の学生たちが、歌ってくれた「蛍の光」は、私の胸に深く突き刺さりました。彼らが、私たちへの思いを込めて歌ってくれたこと。その透き通るような歌声は、言葉や文化の壁を越え、確かに私たちの心を一つにしました。涙が出るほど美しい歌声に、私は心の底から感動し、日中友好は机上の空論ではなく、まさに今、目の前の交流から生まれているのだと強く実感しました。

また、日本の残留孤児にまつわる物語も私に大きな影響を与えました。中国の夫婦が、日本から置き去りにされた子どもを引き取り、我が子として大切に育てたという話です。彼らは、戦争によって深い悲しみと苦しみを負わされながらも、「子どもに罪はない」として、国籍や出自を超えた無償の愛を注ぎ続けたというのです。目の前の命を救い、愛し続けるという、人間の根源的な優しさがそこにはありました。彼らの無償の愛は、政治や国境といった理屈を超えた、本物の「友好」を象徴しているように感じられました。

今回の旅で得た最大の学びは、私たちは歴史を知る義務がある、それ以上に歴史を創造

する人間であることを忘れてはいけないということです。過去の歴史は、決して変えることはできません。しかし、未来の歴史は、今を生きる私たち一人ひとりの行動と選択によって、いくらでも変えることができます。今回の訪中団で築いた友情、そして互いの文化を尊重し、理解しようとする小さな努力こそが、未来の日中関係という歴史を、より良い方向へと導く鍵となるはずです。日中友好は、決して一朝一夕に築かれるものではありません。地道な相互理解の努力と、一人ひとりの人間的な触れ合いから生まれるものです。訪中団で得た貴重な経験を胸に、私はこれからも、日本と中国を結ぶ小さな架け橋でありたいと願っています。そして、この体験を多くの人々と分かち合い、未来の世代へと繋いでいくことこそが、私たちが果たすべき責任なのだと、強く心に刻みました。

「訪中団を通して考えた日中友好のあり方」

1 B 三重大学 林奏帆

私は今回、日中友好協会大学生訪中団の一員として中国を訪れる機会を得た。今回の訪中は単なる観光ではなく、歴史や文化を学び、さらに現地の大学生との交流を通じて相互理解を深めるという目的を持つものであった。その中で特に印象に残ったのは、瀋陽にある九・一八歴史博物館を訪れたこと、そして現地大学での学生との交流である。これらの経験を通して私は、日中友好を進めるために必要な姿勢について多くのことを学んだ。

まず、九・一八歴史博物館の見学は非常に衝撃的であった。館内には1931年の柳条湖事件をはじめとする日本の侵略行為の記録が展示されており、当時の新聞記事や写真、細菌部隊に関する展示もあり、とても印象的だった。こうした出来事は日本の学校教育では詳しく学ぶことが少なく、私自身も訪中するまで深く理解していなかった部分である。日本社会では語られることを避けてきた側面があるように感じ、日本視点でない歴史の語られ方を新鮮に感じると同時に、現地で実際に目にすることで、その重みを改めて痛感した。加えて、日本人として過去の歴史に誠実に向き合う責任の大きさを強く感じた。

また、残留孤児に関するお話をしていただいたことも強く印象に残っている。中国人の養父母と日本人の残留孤児の銅像を見て、戦争によって家族や友人を日本人に殺された当時の中国人でさえ、その怒りや憎しみの矛先を日本人の子どもたちに向けるべきではないと考えていたことを知った。当時の状況を思えば、憎悪が子どもにまで及んでも不思議ではない。しかしその中で、罪のない子どもを守り、育てようとする姿勢があったことを知り、人間としての寛容さと強さに触れ、深く感動した。怒りや憎しみを抱くのは当然であり、決して悪いことではないが、その感情と適切に向き合い、次世代に対する憎しみの連鎖を断ち切る勇気を持つことも友好を築くための大切な力だと感じた。

一方で、大学訪問を通して中国の大学生と直接交流したことも大きな収穫だった。訪中前は、日本人に対してどのような印象を持っているのか分からず、少し不安な気持ちもあったが、実際に会ってみると、中国の学生たちはとても好意的に接してくれ、日本の人や文化が好きだと言ってくれる学生がとても多く、うれしかった。学校生活や趣味、自分の専攻などについて互いに紹介し合い、語り合う中で、国境を越えても共通の話題で盛り上がり、友達としてつながれるということを実感した。こうした友情や信頼関係は、一度築かれれば簡単には崩れず、国家間の関係を長期的に安定させる土台になるのではないかと感じた。

これらの経験を踏まえ、日中友好のために大切なことは二つあると考える。第一に、歴史を知り、継承することである。日本と中国の間には複雑で痛ましい過去があるが、その歴史をきちんと語り継ぐことこそが、日中友好には欠かせない。歴史を継承することは対立や憎悪を再生産するためでなく、過ちを二度と繰り返さず、平和を築くための教訓として生かすために必要なのである。私たちは歴史をただ知識として学ぶのではなく、責任として受け止め、次世代へと語り継がなければならないと感じた。第二に、直接的な経験や交流を通して相手を知ることである。メディアの情報や政治的言説だけを鵜呑みにしてしまえば、どうしても相手の姿は歪んでしまう。実際に自分の目で見て、経験して、関わり合うことでしか得られないことがたくさんあるに違いない。様々な情報を容易に得ることができる現代社会だが、実際に現地を訪れ、人と人の直接的な交流をすることで得ら

れる理解は、机上の知識や報道から得られるものよりもはるかに正確であるうえ、強く心に刻まれるであろう。

今回の訪中国での体験を通じ、日中友好は私たち一人ひとりが築いていくものであると強く実感した。歴史を学び、現地の人と交流し、自ら考え行動すること。大きなことではなくても、積み重ねることによって両国の友好関係を確かなものにしていけると思う。今後も私は、今回得た学びを自分の生活や学習に生かし、日中両国の架け橋の一端を担う存在になれるよう努力していきたい。

「心でつながる隣国との歩み」

1B 青森中央学院大学 原田麻瑚

今回の訪中国では、北京、長春、瀋陽の三都市を訪れる機会を得た。特に今年中国人民抗日戦争及び世界反ファシズム戦争勝利 80 周年という節目にあたり、共産党歴史博物館や九一八歴史博物館などを見学し、日本と中国の歴史に深く触れる時間となった。短い七日間ではあったが、そこで得られた体験や交流は、自分にとって大きな意味を持ったものである。

訪中前の私は、中国という国に対して漠然とした印象しか持っていなかった。ニュースや SNS で見聞きする情報からは、経済成長の著しい国、あるいは日本との間に歴史や領土をめぐる緊張を抱える国、というイメージが先行していた。その一方で、実際に中国の人々と接する機会はほとんどなく、身近に感じる存在ではなかった。つまり、「よく分からない国」という距離感が正直なところであり、その曖昧さが少しの不安にもつながっていた。

しかし、今回の訪中を通して、自分の中での中国像は大きく揺さぶられた。まず印象に残ったのは、人の温かさである。現地で出会った人々の中には、私たちに笑顔で声をかけ、親切に対応してくださる方も多くいた。言葉は十分に通じなくても、交流を楽しもうとする心が感じられ、その温かさに触れるたびに「隣国の人」というより「隣人」としての近さを実感した。

一方で、歴史に関わる場面では複雑な感情を抱いた。博物館の見学中に、現地の人々から冷たい視線を向けられることがあり、日本人である自分が戦争の加害者側に属していることを改めて意識させられた。抗日の歴史を語り継ぐ展示や映像に直面すると、日本と中国の間に今なお横たわる歴史の重みを強く感じた。そのときの居心地の悪さは忘れられないが、同時に「過去を忘れずに未来を築く」というガイドの方の言葉が心に残った。歴史を直視することは痛みを伴うが、それを避けてしまえば本当の理解や和解はあり得ない。

だからこそ、両国が互いの歴史を学び合い、その上で未来に向けた交流を続けていくことが大切だと考えるようになった。

今回の訪中で得た最大の学びは、国と国の関係を支えるのは「心のつながり」であるということだ。国家間には政治的・経済的な利害や歴史問題など複雑な要素が存在する。しかし、結局のところそれらを動かし、乗り越えていくのは人と人との交流である。七日間の中で交わした笑顔や挨拶、ささやかな会話の積み重ねこそが、相互理解の第一歩になるのだと実感した。

日本が隣国として中国と向き合う上で大切なのは、相手を一面的に見ないことだと思う。経済大国としての姿もあれば、歴史の痛みを抱える姿もあり、同時に日常の中で温かさを持つ人々の姿もある。その多様な側面を受け入れ、互いに学び合う姿勢が必要だ。そして自分自身も、今回の訪中を一時的な経験で終わらせず、学んだ歴史や出会った人々を記憶に留め、今後も中国について理解を深める努力を続けたい。

この七日間は、私の人生における小さな転機であった。「中国は遠い存在」から「隣人として共に歩む存在」へと意識が変わったことは、今後の私の学びや人間関係の築き方にも影響を与えるだろう。過去の歴史を忘れず、しかしそれに縛られることなく、未来志向で交流を重ねていくこと。そのために必要なのは政治や経済だけでなく、心を通わせる努力である。訪中での経験は、そのことを身をもって教えてくれた。

「他者を知り、自国を知る旅」

1 B 共立女子大学 福村愛結

私は今回、日中友好大学生訪中団第3陣の一員として、中国の北京、長春、瀋陽を訪れる機会を得た。この旅を通して得られた学びは多岐にわたるが、特に強く心に残ったのは「歴史に向き合うことの大切さ」「交流から生まれる気づき」「日本を外から見つめ直す視点」である。

まず、歴史に向き合うことの重要性を強く感じた。万里の長城や故宮では、中国の悠久の歴史と壮大なスケールに圧倒された。書物や映像で見知っていた場所であったが、実際に自分の目で見ることで、先人の努力や文化の重みを肌で感じる事ができた。また、中国共産党歴史展覧館や「九・一八」歴史博物館、東北陥落史陳列館では、日本との関わりを含む近代史について学ぶことができた。そこでは、中国側からの視点で描かれる歴史に触れ、自国の歴史教育では十分に意識してこなかった側面を突きつけられたように思う。日本にいと「日本は戦争の被害者である」という認識が強く刷り込まれているが、同時に加害者であった事実も決して忘れてはならない。歴史の認識は国ごとに異なるが、だからこそ相互理解のために直接学び、対話する必要があると痛感した。

特に印象に残ったのは「九・一八」歴史博物館での展示である。満州事変に関する写真や資料を通じて、日本の行為が当時の中国社会にどれほどの衝撃を与えたのかを知ることができた。日本で学んできた歴史は、被爆や戦後の復興といった被害の側面に重点が置かれがちである。しかし、現地で見た展示は、日本人が加害者として記録されている部分を鮮明に示していた。自分が学んできた歴史と現地で伝えられている歴史の違いを実感し、歴史は単に事実の集積ではなく、語り継ぐ立場や視点によって大きく変わるのだと学んだ。これは、国際関係を理解するうえで欠かせない視点だと思う。

次に印象的だったのは、中国の学生や現地の人々との交流である。吉林大学や遼寧大学との交流では、同世代の中国人学生の率直な考えに触れ、お互いの違いを超えて親しくなれた。言語や文化の壁はあったが、同じ若者として将来や日常を語り合う中で、国境を越えた共感が生まれた。また、街中で出会った人々が私が日本人だと知ると笑顔で「こんにちは」と声をかけてくれたり、一緒に写真を撮ろうと誘ってくれたりした。そこには国家間の政治的な関係ではなく、人と人との素朴な交流があった。国際関係を大きな枠組みで語るのとは簡単だが、実際に人と人との向き合ったとき、そこには互いを知ろうとする温かさが確かに存在するのだと実感した。

さらに、この旅は自分自身を客観視する機会にもなった。長春世界彫塑園や紅梅文創園、中国工業博物館などを訪れる中で、中国の文化や産業の多様さ、発展のスピードを目の当たりにした。日本も先進的な国であると信じていたが、実際には中国の方が一歩先を行っていると感じる場面もあった。その一方で、日本ならではの強みや特色を改めて考え直す契機にもなった。自国のことを自国の視点だけで語るのではなく、海外から相対的に捉えることの重要性を強く感じた。

一週間という短い期間であったが、この訪中団で得た経験は、私にとって大きな財産となった。歴史に正面から向き合うことの重さ、交流を通じて相互理解を深める喜び、そして日本を客観的に見直す視点。これらは今後の人生においても、常に意識していきたい学びである。未来の日中関係を担うのは、私たちのような若い世代である。だからこそ、今回の経験を周囲に伝え、少しでも相互理解の架け橋になれるよう努めていきたい。訪中を終えた今、私は「百聞は一見に如かず」という言葉の意味を心から理解し、行動に移す責任を自覚している。

「訪中で学んだこと」

1B 愛知淑徳大学 宮地文音

このたび「日中友好大学生訪中団」に参加し、一週間中国を訪れる機会をいただきました。正直に言うと出発前は、大学で中国語や中国の文化について学んでいるものの、どんな経験になるのか少し不安もありました。しかし、実際に現地に足を運び、人と出会い、歴史に触れることで、多くの新しい気づきを得ることができました。

まず印象に残ったのは、中国共産党歴史博物館の見学です。建物の大きさや展示のスケールに圧倒されつつも、中国がどのように近代化を進め、現在の姿にたどり着いたのかを知ることができました。特に、戦乱や貧困を乗り越えようと努力した人々の姿が紹介されていて、発展の裏にある長い道のりを実感しました。普段、日本から見ると「経済大国」としての中国ばかりが強調されがちですが、その背景にある歴史や人々の思いを知れたことは大きな学びとなりました。一方、九・一八歴史博物館の見学は、日本人として心に重く響きました。満州事変を中心に、日本の行動が中国社会に残した深い傷が展示されており、素直に見るのがつらい瞬間もありました。けれども、過去に目を背けるのではなく、歴史を受け止めて次の世代にどうつなげていくかが大切なのだと強く感じました。歴史問題は簡単に解決できるものではありません。しかし、まずは知ること、そして対話を続けることが出発点なのだと強く感じました。

今回の訪中で特に心に残っているのは、現地の方との交流です。私は、せっかく中国語を習ってきたのだから使ってみようと、スーパーに訪れた際、レジに並んでいる後ろの主婦の方に「これは何ですか」と中国語で勇気を出して話しかけてみました。すると「これは麻花だよ」と教えてくれて、「どこから来たの?」と優しく聞いてくれました。もしかしたら無視されるかと思った自分を恥ずかしく思いながらも、心が暖かくなりました。

また、中国の学生たちはとても明るく、フレンドリーに接してくれました。最初は言葉の壁に不安を感じていましたが、英語や簡単な中国語を交えながら会話してみると、意外とお互いに伝わる事が多くて驚きました。お昼ご飯を一緒に食べながら、学校生活や将来の仕事のことなど真面目な話をしたり、好きな音楽や流行について盛り上がりました。翻訳アプリを使いながらも、私の言いたいことを理解しようとしてくれました。同じ世代だからこそ共感できる部分がたくさんあり、国境を越えても「学生同士」として近い存在なのだと実感できました。

今、日中関係は順調ではありません。ニュースでは経済や安全保障をめぐる緊張が大きく取り上げられています。しかし、実際に中国を訪れてみて感じたのは、国同士の関係と人と人との関係は必ずしも同じではないということです。政治的な意見が違って、目の前の相手と向き合えば、理解し合える部分は必ずあります。今回の交流を通じて、ニュースだけを見て「中国はこういう国だ」と決めつけるのは危ういと気づかされました。この一週間は短い期間でしたが、学んだことはとても大きいです。歴史を知り、現在の社会を感じ、未来について語り合うことの大切さを実感しました。私たち若い世代が率直に交流し、互いを知ろうとすることが、将来の信頼関係につながっていくはずです。今回の経験を大切にしながら、これからも日中の橋渡しができるように学びを続けていきたいと思えます。

「不到长城非好汉」(Búdào Chángchéng fēi hǎohàn)

1B 関東学院大学 山田 翔

その日、いつの日か行ってみたいと心に描いていた場所に私はいました。それは、宇宙から見える地球唯一の建造物「万里の長城」です。その壮大さは、思い出だけで今でも心が躍動していきます。

私は、2025 年の夏、日中友好大学生訪中国の一員として、中国を訪れる機会を得ました。一週間という短い期間ではありましたが、私にとって人生の素晴らしい思い出を刻むことができました。ここではその経験を振り返りながら、いくつかの視点に基づき、報告していきたいと思います。

まず、一番印象に残ったのは、羽田から北京の空港に到着後すぐに訪れた「万里の長城」です。自分の足で石段を登ると、想像以上のスケールと迫力に圧倒されました。匈奴のような北方の遊牧民から守るために、紀元前 214 年から秦代の始皇帝が建築を始めたということを学んだが、どこまでも続く城壁は、まるで大地の上に巨大な龍が横たわっているようでした。紀元前の建造物に、今自分が足をおろしているのだと思うと、想像を絶する中国の長い歴史に横たわる人間の力と知恵の偉大さに、畏敬の念を抱かずにはいられません。また、翌日に訪れた「紫禁城」もまた忘れられない場所です。かつて、皇帝が暮らしていた宮殿は、広大な敷地に精緻な建築が並び、そこに込められた権力の象徴性を感じた。金色や赤色を基調とした建物はどれも豪華で美しく、細部にまで意味が込められていることを学びました。特に、左右対称に配置された建物群は、中国文化における秩序や調和を重んじる精神を表しているように思えました。以前、祖母から話に聞いていた中国の歴史ドラマである「瓔珞」や「如懿伝」をぜひ見てみたいと思いました。

次に、この訪中での大きな成果は、現地の学生との交流する機会を得たことです。正直、最初は言葉の壁に不安を感じていましたが、英語や簡単な中国語を交えながら会話を重ねるうちに、だんだんとコミュニケーションをとることができるようになりました。中国の学生の方々は、日本のアニメや音楽にとっても詳しく、日本に対してとても良い感情を持っていることが分かりました。また彼らの勉強に対する真剣な姿勢に大変刺激を受けました。お互いに将来の夢や進路について語り合う中で、自分自身の目標を見直す良いきっかけにもなり、まず相手を知り、そして理解しようとすることの意義を感じました。

今回の訪中を通して得たことは、単なる観光や旅行では決して得られないものばかりでした。歴史的建造物からは、偉大なる中国の先人の未来へと続く智慧を学び、交流からは現在の若者の夢や思いを知ることができました。どちらも私にとって貴重な学びとなり、中国という国をより身近に感じられるようになりました。そして何よりも、異文化を理解しようとする姿勢の大切さ、国を超えて交流する喜びなど、私の今後の人生の羅針盤ともなったことです。“不到长城非好汉”-この決意をもって、自身に悔いのない挑戦を続け、日々精進していきたいと思います。

今回、このような素晴らしい訪中国の一員として参加させていただき本当にありがとうございました。また、惜しみない真心で接していただいた団長、随行員の先生の方々をはじめとする日中友好協会の皆様、及び受け入れて下さった中国の方々に心から感謝申し上げます。